はじめに、ちょっとひと言！

［風評被害と情報提示］

最近の風評被害というと、鳥インフルエンザで焼き鳥やがつぶれそうになっているという話があります。我が家でも庭のひよ鳥が被害にあっています。隣の庭に餌台が置いてあり、毎朝ひよ鳥が美味しそうに餌をついばんでいる姿を窓越しに眺めていたのですが、最近隣人が「ひよ鳥は渡り鳥ではないけれど念のため餌をやるのはしばらく止めます」と云って餌を与えなくなりました。その日以来、ひよ鳥は「からの餌台」にやってきては餌を探すのですが、その姿がなにか、もの悲しさを誘います。

ところで、今回のBSE騒動（牛丼騒動）のなかで、「吉野屋」の社長がテレビのインタビューに応えて「日本人の安心感は非常に情緒的で、欧米人の理論に裏打ちされた安心感との乖離が牛丼問題の発端である」と述べていました。

確かに、日本人はある情報に対して過敏に反応し右往左往する傾向にあります。しかし、それは情報が正確に提示されていないというマスコミ報道の責任によるところが非常に大きいと考えます。

医療安全においても、情報の正確な提示が重要であります。情報を提供し、共有することが医療事故（過誤）を減らす最善の方法です。今回は、社会の高齢化に伴う医療事故の現状を看護部に纏めてもらいました。今後も引続き、具体的な数字を提示しながら医療事故に関する情報提供を行っていきます。

小川　健二

医療安全だより《第２号》

－ 看護部より－

発行　平成16年2月27日
医療安全管理委員会

転倒・転落にみる高齢化の実態と事故発生の現場

当部における事故発生の主なものは、誤薬と転倒・転落である。
超高齢化社会に伴いH14年度の日本における65才以上の比率は、18.5％を占めている。当然、入院される患者の割合も増加しており当院における65才以上の入院患者は現在の所、全体の45％強と年々増加の傾向にある。

安全は、基本に置くべき保証であり患者の安全確保の為、医療の現場では様々な取り組みが行われ、中でも転倒・転落防止への取り組みは安全確保の第一段階であり老人看護における最重要課題の一つといえる。
今回は、転倒・転落に焦点をあて実態と現況を述べる。

当院のH14年度における調査では、転倒・転落の届出は全体の32％を占め誤薬の35％に次いで2番目に多い数となっている。
年代別の内訳は表1に示す通りである。

表1

年　代	40代未満	50才代	60才代	70才代	80才代	90才代
発生割合			0.9%	32.4%	42.8%	10.3%

ちなみにH13年度は、80才以上の占める割合は30％だったのに対しH14年度は56.1％と、80才以上の占める割合が急激に上昇しているといえる。H15年度の統計処理は年度末に行う予定であるが、月々の報告書から予測すると益々増加しており、特に療養型病棟の設置による高齢者数の増加も大きな要因になっている。

転倒・転落の時間帯をみると夜間に多く表2に示す通りとなっており、21°～9時までをみると62％と全体の2/3を占めている。

表2

時間帯	0～3	3～6	6～9	9～12	12～15	15～18	18～21	21～0
％	22	9	16.8	9	14.2	7.7	6.4	14.2

転倒・転落時の患者の行動目的を分析したものを表3に示した。

排泄行動に関連したものが32.3％以上となっている。

表3

行　動　目　的	％
トイレに行こうとして	17.6
ポータブルトイレに関連して	5.9
車イスに関連して	23.5
車イストイレに関連して	8.8
不明	16.1
他	27.9

入院して事故が発生するまでの日数を表4にまとめた。2割の方が早期に発生している。

表4

日　　数	％
1～3	19.5
4～7	9.1
1W以上	27.9
1M以上	44.1

以上転倒・転落における実態を述べた。

高齢者の方が入院されると疾患により安静臥床・持続点滴を強いられる事が多く、ADLの低下を招く事が少なくない。又、不眠を訴える患者や夜間せん妄になる患者も多く、転倒のリスクが非常に高い状態にある。高齢者にとって夜間は暗く慣れない環境に置かれ通常の判断が出来ない状態にあると考えられる。夜間の排尿パターンを知り、計画排尿したりの試みがとられているが入院初期は把握できない事も多い。転倒予防対策として、転倒アセスメント、マッタ君や離床センサー等を活用しているものの意識レベルの低下、痴呆、不穏による転倒には苦慮しているのが実態である。患者の安全を守り、安楽な入院生活を確保するため今以上の転倒・転落防止に努力していきたい。

以　上